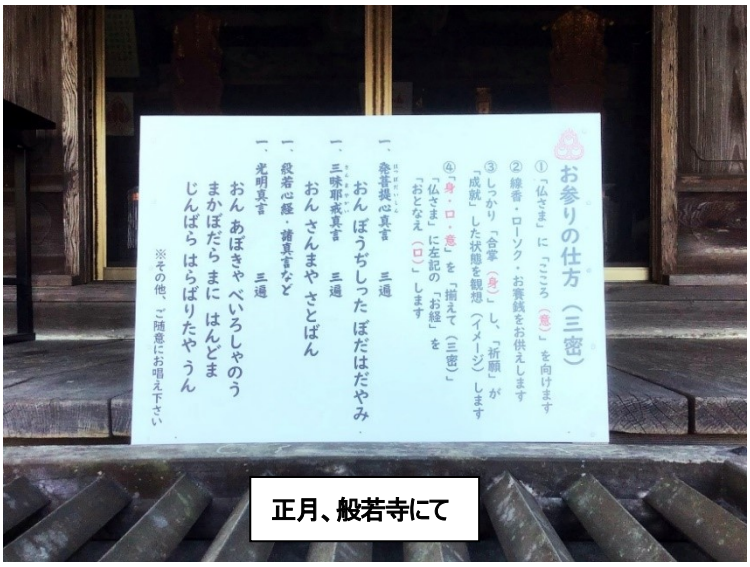
山登如

2020年度
付中通信第１６号
いつもと違う風景

2021.1.12（月）　　高水高等学校付属中学校長　宮本　剛



正月、般若寺にて

2021 年が明けたが、年末年始の様相が一変した方も多かったろうと思います。かく言う私も例外ではありません。師走の 28 日が仕事納め、その日も最後に校舎を出たのは私でした。そこまでは例年どおりでしたが、この日、東京から帰郷するはずの次女が帰られなくなりました。

新型コロナウイルスの感染が広島や岩国でも一気に拡大、東京は連日、感染者数を更新していました。そうなるともう次女に帰って来ていいなどとはとても言えなかったのです。その翌日には長男も京都から夜行バスで帰郷する予定にしていましたが、私は意を決して二人に帰郷を思いとどまらせました。

昨年はお盆も家族で一緒に過ごせなかったので、４人の子どもたちは正月こそはと大いに楽しみにして、それぞれが帰郷の日程を調整してくれていました。４人のうち二人は私の最初に発した黄信号でしぶしぶ帰郷を思いとどめたのですが、残りの二人は諦めきれず交通機関のチケットを予約していました。これと同じような憂き目を見た家族が全国に数え切れないほどいたと思います。

一人きりとなった年末年始でしたが、私の作法は変えませんでした。近隣の里山に入り込んで不要な雑木竹の伐採に汗を流し、それが一段落した後は、縁の深い家々の庭の手入れに精を出しました。無我夢中で自然と格闘すること丸３日、筋肉痛できしむ音が身体中から聞こえるようでしたが、同時に心が満たされる感覚に包まれました。例年になく気温が下がった年の明け暮れだったのに、まったく寒さを感じません。それで、身体を動かせば暖かくなる、そんな当たり前すら忘れている自分が少し怖くなりました。

家族のいない初めての正月、気ままな気分で私は、初詣は地元の八幡様を避け、少し車を走らせて今までお参りしたことのない古刹を目指すことにしました。同じ市内の、海に近い旧街道沿い、鎮守の森にたたずむ神社と、柳井半島へ続く山道の途中、見晴らしのよい高台に建立されたお寺、その２か所を梯子して回りました。

参拝を終えた神社には少し潮のにおいが漂ってきて、その香りにつられて破魔矢を買い求

めました。後日、新学期が始まって受験生のクラス担任にそれを届けました。破魔矢は教室の前にきちんとしつらえられ、神々しさを放ちながら受験生を鼓舞するかのように、廊下を通るたび私の目に映りました。

半島への入り口までは迷わず車を走らせることができましたが、途中標高も高くなり曲がりくねりながら登る山道には日陰ごとに残雪があって、それが理由ではないと思いますが、２回も道に迷いました。

そしてようやくたどり着いたお寺は般若寺でした。真言宗のお寺です。空海が中国から持ち帰った密教に基づく仏教宗派です。日本で歴史が最も長く、誠に由緒正しいお寺ということになります。社殿の書きつけに曰く、「神峰山般若寺は、 古来より瀬戸内海を往来する人たちを見守る『大畠瀬戸の灯台』としての役割を担って今日に至っております。また、大畠瀬戸に伝わる「龍宮伝説」「般若姫伝説」の舞台でもあります」と。

瀬戸が一望できる寺院のそこここを足の向くままに巡っていると、住職らしいお坊様の説法が聞こえてきました。その内容も見る間に聞き取れるようになりました。すると、ああ、これも出会いだ。しかも新年のめでたい一期一会だと悟り、社殿の外で耳を澄ませ、思わず説法に耳を集中させました。

般若寺から見える柳井半島（上関方面）の眺望

社殿の上がり口に「お参りの仕方」と題する注意書きがありました。かつて高校倫理を教えていたこともある私は、そこに説かれた「三密」に目を見張りました。「三密」は仏教の三密だったからです。コロナ禍で右往左往しているうちに最近作られた「３密」に慣れ、本来の「三密」を忘れていた自分が腹立たしくなりました。

人間って、こんな風に簡単に大切なことも忘れてしまうものなのだと、自分自身に呆れたのです。正月早々、我が身を顧みるよい機縁をいただいて帰路に着きました。

帰宅してから改めて「龍宮伝説」や「般若姫伝説」をひも解いてみました。瀬戸内海や柳井周辺の古代の暮らしと願いを理解する上で大変興味深い物語でした。ここで紹介したいのは山々ですが、長くなるのでもうこの辺でやめます。

お寺を立ち去るにあたって石碑に曰く、「虚しく門に至り　満ち満ちて帰る」とございました。